

安岡章太郎

DEN B



僕の昭和史
I

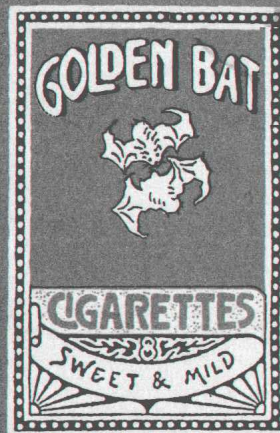
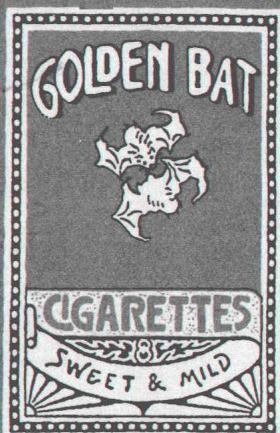
ARETTES

ET & MILD



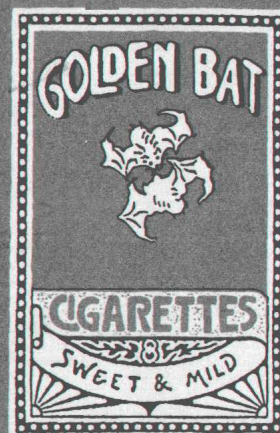
僕
の
昭
和
史
I

安
岡
章
太
郎



僕
の
昭
和
史
I

安
岡
章
太
郎



僕の昭和史①

定価——一三〇〇円

昭和五九年七月二〇日第一刷発行 昭和五九年一〇月八日第四刷発行

著者——安岡章太郎

© Shotaro Yasuoka 1984 Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話三—六四—二二 振替東京八一五〇

印刷所——株式会社精興社 製本所——株式会社藤沢製本

ISBN 4-06-201201-4 (0)

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。(学1)

僕の昭和史①

装幀 田村義也

「ゴールデンバット」は、明治三十九年発売。昭和に入り、代表的なタバコとして愛好されたが、戦時中「金鶏」と改名、多くのファンを落胆させた。

僕の昭和史は、大正天皇崩御と御大葬の記憶からはじまる。天皇の崩御は大正十五年十二月二十五日、御大葬は翌昭和二年二月七日ということだが、僕の記憶ではこの二つは同じ日であるようだ。僕がハッキリおぼえているのは、母が隣の家のおばさんと、こんな話をしていたことだ。「昭和だなんて、古臭い名前だわねえ、何だか明治に似ているじゃないの。大正の方がずっとスツキリしていてハイカラなのに……」

しかし僕にとって、何より残念だったのは、『御大葬ノ歌』をおしえてもらえなかったことだ。その頃、僕は朝鮮京城の憲兵隊官舎に住んでいた。父は職業軍人で陸軍獣医大尉であり、僕は南山幼稚園にかよっていた。となりが南山小学校で、そばを通ると重おもしろい歌声がきこえた。

地にひれふして 天地あめつちに

いのりし誠 いれられず
日出づる国の くにたみは
あやめもわかぬ 闇路ゆく

大葬おほみはふりの けふの日に

流るる涙 はてもなし

きさらぎの空 春浅み

寒風いとど 身にはしむ

勿論、僕はこの歌詞を完全におぼえているわけではない。一番の「あめつちに」というところと、二番の「さむかぜいとど、みにはしむ」というところが、かすかに記憶に残っている程度で、あとはみんな忘れてしまった。それなら、なぜこの歌が僕に強い印象を残したかといえば、それはこのとき『世代』の断絶といったものを初めて味わわされたからだ。幼稚園の友達I君の姉さんは、小学校二年生で、この歌を一人でよく口ずさんでいた。しかし僕らが、それを教えてくれとたのむと、絶対にダメだという。おそれおおくも天皇陛下のおかくれになった歌を、みだりに教えるわけにはいかないというのである。それは僕には、不当な差別であるように思われ

た。僕らだって、あと二、三箇月すれば小学校へ上るというのに、なぜ僕らだけがあの歌をうたつてはいけないといわれるのか——？

大袈裟なことを言っていると思われるかもしれないが、後年、戦争のきびしくなった頃、僕らは実際に二、三箇月の生れ月の違いが生死の別れ目になるという妙な運命にあわされた。まして一年二年という年齢の違いは、平時の十年二十年に匹敵する差違を、われわれ日本人同士の間にも生むことになったのだ。無論、僕らはふだん、このような生れ月や年齢による考え方の違いなど、べつに気にもしないし忘れている。しかし、たとえば個人的な体験を主にした「昭和史」というようなことを考えると、この大したこともなさそうな差違が俄然大きなものになってくる。たしかに、戦争や敗戦が大きな共通体験であったことは間違いないが、その部分部分を取り上げて、おたがいに語り合おうとすると、同じ学生上りの「戦中派」同士でも学年のちよつとした違いから、話がまったく噛み合わなくなつて、いったい何が共通体験かと思ふようになる。

ところで、共通体験というのは、大震災とか空襲とか集団疎開とか、要するに大きな不幸を共にすることであつて、幸福の共通体験というものはないらしい。しかも、トルストイのいうように、「幸福な家はみな一様に似通つたものだが、不幸な家はいづれもとりに不幸」なのである。つまり、幸福という「みな一様に似通つたもの」を僕らは共有することは出来ず、家によって個人によつて「いづれもとりにどり」であるところの不幸によつて、僕らは共通の体験——歴史

というもの——に、参画することになるわけだ。ここに個人史による現代史というもののムツカしさがある。僕らが、個人的に自分のこうむった時代の不幸を熱心に振りかえれば振りかえるほど、ますます「共通体験」の共通項からはずれて、何かしら特殊な、偏見にみちた、自分個人の不幸のグチをくどくどと語ることになりがちだからである。

それはさておき、大正天皇の崩御で全国民は喪に服することになった。この服喪の期間が、一年間であったか、半年ぐらいでおわったかは、もう忘れてしまったが、何にしても僕らは、小学校の入学式のときから服に喪章をつけて行き、しばらくの間、ことあるごとに、男の子は洋服の袖に黒い腕章を巻き、女の子は胸に黒いリボンをつけさせられていた。

第一次大戦にはほとんど参戦せず、名目上の戦勝国になったわがくには、英、米、仏、伊などと並んで世界の五大国とかいうものの一つになり、未曾有の好景気にわいたわけだが、僕の生れた大正九年（一九二〇）頃には、すでに不況の影がはじまろうとしていた。「日本の歴史年表」に入った昭和二年（一九二七）からは、本格的な不況がはじまろうとしていた。「日本の歴史年表」（中央公論社）によると、

三月十四日 衆議院で片岡蔵相、渡辺銀行破綻と失言。（十五日、取付のため休業。この日、銀行取付、休業続出）

とある。無論、子供の僕が銀行の取付け騒ぎだの不況だのということを知っているわけがない。ただ、この失言をした片岡という人は母方の祖父の従兄とかに当たっていたから、この人が何か大失策をやらかしたらしいということは、母と父が新聞をひろげて話し合っているのを見て、何となく僕にもわかった。芥川龍之介が自殺したのは、同じ年の夏であるが、たまたま同じ頃に、母の姉のつれあいが株で失敗してピストルで死んだ。その人の家には、僕も連れられて遊びに行き、何度か泊ったこともあるから、大変なことになったという気はしたものだ。

このように昭和時代は、その幕あきのしょっぱなから不吉なことが続いて起り、前途多難をおもわせるのであるが、それにしても僕自身、その頃のことを振りかえると、そんなに暗い感じはしない。むしろ僕たちの一家にとって、それは最も明るく、幸福な時代であったような気がするくらいだ。一つには、当時の京城という都会が大方の日本人にとって快適な街だったからだろう。

いまの京城、つまりソウルは、人口五百万とかの超過密都市で、東京と同様、或いはそれ以上に活気はあるけれど、自然環境の破壊も甚だしく、むかしの面影はまったくない。僕らのいた頃の京城は、人口はたぶん五十万ぐらい、小さいながら良くまとまって、ハイカラな感じの街だった。

僕らが住んでいたのは、本町（いまの忠武路）という目抜き通りの直ぐ裏手で、おもての通り

には三越だの銀座の亀屋の支店だのが並んでいた。本町を南に行くと南大門の広場があり、そこには朝鮮銀行、その他、大きな会社の建物が集っており、また町をちょっと出はざれたところに南山という丘があって、そこに僕のかよった幼稚園や小学校がある。この南山は、いまはK C I Aの本拠になっており、山の斜面一帯は新興資産家の住宅地になっていて、花崗岩やレンガで囲った家がぎっしり立ち並んでいるが、僕らのいた頃は朝鮮には珍しい青々とした丘陵地帯だった。学校は斜面の中腹にあって、そこから少し奥に這入ると、深山幽谷のおもむきがあった。春先きなど、岩肌に張った氷の裂け目から奇麗な清水が湧き出しており、手をつけると千切れるほど冷たかったが、すくって飲むと体の中までスーッとするような、爽快な味がした。

空は、ほとんど一年じゅう晴れており、とくに冬になると青く澄んで、カーンと音がしそうな冴えた色をしていた。

無論、スモッグなんかは全然ない。ただ、僕らは自動車には割合によく乗った。他にこれといった交通機関がすくなかったせいでもあるが、何といっても僕ら日本人はここで特権階級だったからだ。父は「やっそこ中尉に、貧乏大尉」という大尉だったから、そんなに豊かな暮らしが出るはずはなかったが、軍人は景気不景気には左右されない職業で、給料も外地手当がついていたし、住居は官舎で家賃もいらぬから、経済的には内地勤務よりよほど楽だったはずである。僕は、ここへきて初めて、チョコレートだの、ハムだのソーセイジだのというハイカラな菓子や

食べものの味をおぼえた。父は長四角の青い罐に入ったウエストミンスターというタバコをふかし、母は髪をアイロンで縮らせて耳かくしという形に結っていた。

朝鮮の冬の空気はきびしく、零下十何度という日も珍しくはなかったが、とくに寒さというものは感じたことがない。どの家にも、床全面を暖めるオンドルがあったし、他の部屋には石炭ストーヴが真っ赤にもえていたから、日本内地の冬の生活よりはずっと温かかったろう。ただ、一と冬に何日か、とくに寒い朝には、本町通りの商店の軒下で寝ている朝鮮人の少年が凍死体で見されたりした。そういうとき、日本人はなぜかひたすら怖れるのであった。

「朝鮮人はこわいわね」と、母も隣のおばさんと話していた。「こんな寒いときに、わざわざ裸にナンキン袋を着ただけで寝ているんですもの。あれじゃ、死なない方がフシギよ……」

「でもね、可哀相だとおもって、日本人がシャツだの服だのをやると、あの子たちは怒って、びりびりに引き裂いて、わざと寒いふりをして震るえて見せるんですってよ」

「そうですってね、だから朝鮮人はこわいっていうのよね」

本町は、前にいったように京城で目抜きの通りで、横浜や神戸の元町なんかにも似てシャレた店が多かった。しかし、このなかで朝鮮人のやっている店が一軒でもあったらどうか。店員も、客も、道を歩いている人も、日本人ばかりだったような気がする。そんななかでポロを着た朝鮮人の子供は、一番奇麗な店の明るいショーウィンドウの前で、ごろりと寝そべて金をねだるの

だ。通りがかりの人が、着るものや食べものをやっても、そんなものは受けとらない。彼等が狙っているのは金だけだ。勿論、店としては迷惑だから、ときどき店員が出てきて追い払うが、少年たちはいくら追い払われても、店員が店の中にひっこむと、またもとのところで寝そべったり、うずくまったりする。また、店員が出てくる。しかし、少年は動こうとはしない。腹を立てた店員は、バケツで水をまいたり、少年の手や耳をひっぱって立たせようとしたりする。少年は大きな声で泣き叫ぶ。

「アイゴ！」

僕は、そんな光景を何度か見た。それは、たしかに怖ろしかった。しかし僕は、朝鮮人の子供のしぶとさに怖れをなすというより、あの子供が店の前で寝ていたいというのなら、なぜもっと寝かしておいてやらないのだろうか、という素朴な疑問の方が強かった。

その頃、僕の家では蓄音機を買い入れた。勿論、電気蓄音機ではなく手廻しゼンマイ式のものだったが、箱の中から楽隊の音がきこえてくるというだけでも、驚くべきものであった。「砂漠に日は落ちて」、「君恋し」、そんな歌がはやっていたが、僕がとくに愛好したのは、二村定一の「笑い葉」という歌で、これはレコードがすり切れるほど聴いたから、メロディーも歌詞もよく覚えていた。

なーんぼ何でも、世の中に

これほどバカげたことが、あるものか

こないだも、電車の車掌に

笑い葉を飲ませたら

「尾張町」アッハッハ……、「みなさん乗り換え」ワハハハハ

これでは車掌はつとまらない

きょうから廃業、ワッハッハッ

というのである。「なーんぼ何でも」という間のびのした声と、「ワハハハハ」というけたたましい笑い声とが、何度くりかえしてきいても面白く、僕はひまさえあればそれをかけて、自分も笑いこけていた。

それにしても、手廻しの蓄音機が文明の利器で、一種のステータス・シンボルでもあったような当時の日本は、軍事的には五大強国の一つであっても、他の点では『発展途上国』であったというべきであろう。いまのように、学生が夏休みにアルバイトをして自動車を買えたり、各家庭に電気洗濯機や真空掃除機が行きわたるなどということは、考えられもしなかった。真空掃除機といえ、僕が初めてそれを見たのは、朝鮮へくる途中、大阪で伯父の家に泊ったときだ。この伯父は、大酒飲みの発明狂で、何でも銭湯の脱衣場で自分の着ているものを箱に入れると、その

番号が浴場の富士山の絵の下にピカリと電気仕掛で光る、そして誰かがその箱に手をつっこむと、とたんに番号のついている電気がチカチカと明滅するので盗難予防になる、というそんなヘンな特許を百幾つも持っていることが自慢であった。また、この伯父は、珍しいものがあれば何でも買いこむくせがあり、電池のいらぬダイナモツきの懐中電燈などを得意になって持ち歩いたりしていた。そのときも、「お前らは朝鮮へ行ったら、こんなウマイ酒は飲めまい」と、さかんに父に酒を飲ませているうちに、自分が酔っぱらって、何か黒い物干し竿のさきに小さな箱のついたようなものを持ち出してきて、僕に、

「こりゃ坊主、これは何でも吸い取る機械やぞ。お前、ここで小便をやってみい、すぐ吸いとってやるぞ」

と、自慢してみせた。僕は、ほとんどそれを真に受けて、あわやその場で本当に小便をしようとしたところを、伯母と母とに叱られて止めた。つまり、それが真空掃除機であったわけだが、子供の僕はこれも伯父の発明にかかる神秘的な装置であろうか、と半ば本気で信じていた。

しかし、その頃、洗濯機や掃除機が普及しなかったのは、一つには人手がいくらでもあって、中流家庭では一人か二人、女中を雇っていないところはないぐらいだったからだ。京城でも、母は日本人の女中を置いていた。最初はハルという人がいて、これがやめるとユクという人がきた……。考えてみると、これは当時、いかに人手が安かったかというだけではなく、いかに多勢の

日本人が朝鮮へ出掛けていたかということでもあるだろう。当時は日韓合併後、まだ二十年とたっていないが、日本人は朝鮮のなかに完全に日本人だけの社会をつくり上げていた。南山幼稚園にも、南山小学校にも、朝鮮人の子供はたぶん一人もいなかったはずだ。そんなだから、僕は朝鮮に何年いても、朝鮮語というものは、二、三の単語を知っている程度で、まったく憶えようとしなかった。それどころか、朝鮮人に朝鮮語をつかうことを禁じ、朝鮮人ばかりを集めた朝鮮の学校で日本語の教育を強制した。そして後には、朝鮮人の姓を取り上げて日本姓にあらためさせるようにした。

これは、僕ら日本人の差別心の特異な構造をあらわしているかもしれない。たとえばアメリカ人は、アフリカから連れてきた黒人に、ジムだのジョーだのと勝手な名前をつけて奴隷にしたが、家の中へ黒人を入れて、家事も黒人にまかせ、白人の赤ん坊は黒人の乳母の乳房を吸って成長したし、台所や給仕も全部黒人の仕事であった。だから、アメリカ南部の白人の味覚は、上流の家庭であればあるほど黒人化されてしまったといわれるくらいだ。僕らから見ると、こういうアメリカ南部の白人が、黒人と同じテーブルでは絶対に食事もせず、同じ便所もつかわせないほど、きびしく差別していたことは不思議である。しかしアメリカ人から見ると、われわれ日本人の朝鮮人に対する差別は、じつに奇妙で不合理なものに映ったにちがいない。

いや、日本人の朝鮮人差別は、不合理というより、無理な背のびというべきかもしれない。明治以来、わがくには、アジアのなかの「名誉白人」的な地位にのし上り、朝鮮を植民地にしたうえ、アメリカやイギリスと中国の市場を争うにいたった。しかし、せいぜい手廻しの蓄音機ぐらゐが家庭のなかの唯一の文化的器具であった僕らは、ほとんどの家にT型フォードや新型のシヴォレーなどの自動車が行きわたっていたアメリカなどと、まともに争って勝てるわけがない。他民族を征服し差別するのだから、日本人と朝鮮人の差違は、アメリカの白人と黒人の文化的落差とは、較べようもないほど小さなものに過ぎない。だから、差別の問題を道徳的に問いなおすことはさて置いて、僕らは能力からいって、アメリカ人やイギリス人のように、アジアで他民族を支配したり差別したりすることは不可能だったはずである。要するに、日本が「名誉白人」になれたのは、アジアで他の国よりも何年か先きに近代化のスタートを切ったというだけのことだ。しかも、その頃、アメリカでは資本主義経済の根幹をゆすぶるような大恐慌を迎えようとしていたのだから、日本がその影響をまともに受けないはずはない。

昭和三年の秋、新しい天皇の即位式があり、御大典ということで日本中がお祭り騒ぎになった。京城でも、本町通りを三越の鼓笛隊を先頭に、山車だしが何十台もつづいて練り出し、僕は昂奮した。とくに京城ホテルの山車には、小学校で僕の隣の席せきにいる女の子が、お姫様の恰好をして乗りこんでおり、髪に花飾りをつけたその子の白い顔が、群衆の頭ごしに次第に遠ざかって行く